

茶と向き合うということ

駿台甲府高等学校一年（山梨県）

齋藤 貴延

「茶の湯とはただ湯を沸かし茶を点てて飲むばかりなる事と知るべし」利休居士の言葉である。

コロナの脅威が世界を覆い、人と人が集まる場が奪われていく。「ただ湯を沸かし」どころではない。茶道においてもその性質上、政府の指針に抵触してしまう部分が多く、稽古や茶会の多くが中止を余儀なくされた。初めのうちこそ、緊急事態宣言が明けるまでの辛抱だと自主稽古に励んだり、禅語の勉強など後回しにしていたものを勉強していたが、長引くにつれ、だんだんと不安になってくる。師の稽古を受けることが出来ない時間が長くなればなるほど、点前の間違いや、綻びは大きくなりずれていく。しかし、そんな心配も思った以上に早く解消されることとなった。十六代坐忘齋お家元がいち早く新たなルールや感染防止の対策を鑑みた稽古のあり方の指針を出してくださり、教場再開の運びとなったからである。

お家元が提唱されたのは、十三代圓能齋宗匠がスペイン風邪の流行の際に考案された「各服点」であった。その当時、ようやく日本に根付きはじめた公衆衛生をいち早く取り入れ、それまでになかった方法を考案されたのだ。お家元はそれに加え、稽古や講座動画の配信や密にならない茶会など、多くの新しい方法を発信され続けた。思えば、我々が学園祭で披露する立礼も、十一代玄々齋宗匠が明治五年の第一回京都博覧会に際し、諸外国の方々に向けて考案されたものだ。茶道の概念を変えずに、そのあり方を変革する。変革は常に痛みを伴うという。どのお家元も相当の苦労を経て考案されたに違いない。今私たちが裏千家茶道で学んでいるのは、そうした時代の大きな変化や障害を乗り越え、脈々と受け継がれて守られてきた裏千家の歴史そのものであると言えるのかもしれない。

元来、ネットを利用した活動に私達世代は強い。コロナが蔓延する前から、生活の大部分はネット環境で成り立っていたからだ。それを生かして感染症対策の為部活動が休みとなった夏休みも動画を使った稽古やSNSの活用などの工夫をしながら研修を重ねた。例えば自宅に茶道具がなくとも、茶道には見立てという文化もある。無いからできない、ではなくどうしたらできるか。それぞれが、創意工夫をする。そこには、確かに茶道の教えが根付いている。新しい技術の助けを借り、古き良き物を繋ぐこともまた楽しい。

しかし、茶道の根幹に関わる部分を全てリモートで学ぶことは難しい。点前を覚える事と、道を学ぶという事は全く違う。単に手順を覚えれば良いというわけではない。道を学ぶ事は、目には見えない精神を学ぶという事だ。茶道において、精神の修煉は他者との関わりの中に生まれる。茶を通して対話し少しずつ悟っていく。禅問答の繰り返しのようなものだ。それを忘れ、ただ技の善し悪しだけをつきつめれば、未熟な精神は自己の過信と未熟さ故の欺瞞を生む。中身を伴わない型など滑稽なだけだ。

「規矩作法まもりつくしてやぶるとも離るとても本を忘るな」と利休居士道歌の最後にある。茶道が様々な流派に分かれながらも、今日まで続いてきたのは、先人達それぞれが自分の目指す茶の道を探しつつも、「本を忘るな」を遵守してきたからだ。この難局において、規矩作法をまもり、そして守った上でどのように離れるか。破りつくされた物だけが残ってはならず、果たすべき役割は大きい。

裏千家茶道の末席に身をおく者として、今の自分に何ができるのか。毎日の稽古の積み重ねのなかで考えることがある。まだ、未熟な自分がそのような事を考えること自体が、慢心であると言えるのかもしれない。しかし、今の等身大の自分の延長線上に自分の目指す茶があるのだとすれば、どんな困難な状況であろうと、日々真摯に茶の道に向き合い続けることこそ大切なのではないだろうか。